

学生生活評価を取り込んだ武蔵野大学全学基礎教育 課程の授業評価に関する分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩田, 弘三, 北條, 英勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/43

学生生活評価を取り込んだ 武蔵野大学全学基礎教育課程の授業評価に関する分析

岩田 弘三・北條 英勝

1. はじめに

武蔵野大学では2010年度から、薬学部を除く全学的体制として、大学1年生を対象とした、全学生必修の基礎教育課程を導入した¹⁾。この全学基礎教育課程は、「武蔵野BASIS」と名づけられている。そして、この新教育課程を改善していくために、その課題・問題点を洗い出すことを目的にして、2010年の前期授業の最終日（8月4日）に、「武蔵野BASIS」を構成する科目についての授業評価アンケート調査を実施した（以下、2010年度調査と呼ぶ）。その結果については、すでに前年に報告した²⁾。

この報告などをもとに、2011年度には、いくつかの小規模な改善がなされた。そして、その改善が効力をもったのかどうかの確認も一つの目的として、2011年度に第2回目の授業評価アンケート調査を実施した（以下、2011年度調査と呼ぶ）。加えて、2011年度調査では、2010年度調査の結果を踏まえて、アンケート項目を大幅に修正・追加した。具体的にいえば、主要な修正・追加点は、以下のとおりである³⁾。

(1) その最大の追加点は、授業評価の枠を超えて、学生生活意識に関する質問項目を加えたことである。具体的にいえば、「読書習慣」、「新聞を読む習慣」、「高校までの授業との相違」意識、「大学生生活満足度」である。

たとえば、総体としての大学生生活への満足度は、④大学での授業に対する全般的な満足度のみならず、⑤大学での友人との交友関係満足度、の2つの要素によって規定されていることが分かっている⁴⁾。そこで、かりに「大学生生活満足度」が授業評価に影響を与えているとすれば、授業満足度はさておくとして、交友関係満足度関連の要因をもとにした「大学生生活満足度」が、大学での授業適応に影響を及ぼしていることも考えられる。だとすると、大学での授業適応の問題を改善・解決するためには、大学のなかでの交友関係の構築促進が、重要な課題の一つとして浮かび上がってくる可能性がある。また、「高校までの授業との相違」が授業適応（授業評価）に影響を与えているとすれば、何らかの手段で、高校教育と大学教育の違いを学生に認識させることが必要になってくる。「読書習慣」、「新聞を読む習慣」についても同様である。つまり、以上に示したように、授業適応の問題は、授業に関する評価の枠内だけでは、納まりきらないことになる。

授業評価アンケート調査は、これまでに多くの大学で実施されてきた。一方で、学生のキャンパス・ライフに関する調査・研究も数多く蓄積されてきた。しかし、学生のキャンパス・ライフの送り方が、授業評価にどのように影響しているのかについては、ほとんど研究がなされてこなかった。そこで、今回の調査の最大の目的は、それら両方の視点を繋ぎ合わせる形での解析を進めることにある。さらに、そこには、2010年度調査と同様に、大学成績など

をデータとして取り込んだ分析も取り入れることにする。

(2) 2010 年度調査は、「武蔵野BASIS」を構成する科目について、学生の声として漏れ伝わってきた、個別の課題・改善点に関して、その実態を明らかにすることを、第1の目的にして実施された。それが優先されたため、個々の授業科目の総合的授業評価項目は、ポリシームの関係で割愛せざるをえなかった。その欠点を補うべく、すべての科目についての共通の質問項目として、授業満足度を追加した。

(3) 「武蔵野BASIS」を構成する科目のなかには、1年生全体を2分割し、前期もしくは後期のどちらかでそれを履修しなければならない科目が存在する。しかし、2010年度調査は、前期授業が終了した時点で実施された。このため、そういった開講形態をとる一部科目については、前期段階ではまだこれらの科目を履修していない、約半数の学生からの授業評価アンケート項目は、無回答として処理せざるをえなかった。そのような欠陥をなくすため、2011年度調査は、1年生時の授業が終了した時点で実施することにした。

(4) 2010年度調査では、個別科目ごとに「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」を評価する形式になっていた。しかし、後述するような理由もあり、科目の別を問わず、総合的に評価する形式にした。

以上の点を踏まえた上で、本論の主要目的は、「読書習慣」、「新聞を読む習慣」、「高校までの授業との相違」意識、「大学生生活満足度」といった学生生活意識と、授業評価との関連を明らかにすることにある。そして、その分析に至る前段階として、2010年度調査に関する分析を補う。そこでは、2011年度調査について授業評価の単純集計結果を示すとともに、その分析を進める過程で、2011年度に行われた、いくつかの小規模な改善が、有効であったかどうかの確認も行う。

なお、2011年度調査についても、2010年度調査と同様に、学生の生の声をもとに数量的分析を補うことを目的に、自由記述に関する分析も行うことにした。これについては、本紀要所収の黒河内利臣論文を、あわせて参照されたい。

2. 調査の概要

2011年度調査についても、2010年度調査と同様に、「武蔵野BASIS」を構成している科目すべてが、授業評価対象となっている。「武蔵野BASIS」を構成している科目に関する授業内容などについての概要は、すでに前回の論文で要約しており、今回の調査までに大きな変更はなされていないので、割愛した。前回論文を参照されたい⁵⁾。

2011年度調査は、2011年度の「基礎セルフディベロップメント」の後期授業の最終日(2012年2月1日)実施の授業中に、アンケート調査票を配布し、その場で回収するという方法で行った。なお、「基礎セルフディベロップメント」は、薬学部を除く全学部の1年生を対象として、21クラスに分割して、同一時間に一斉に行われている必須授業である。

有効回答数は1,294人であった。

参考として、アンケート調査票を、本論文の巻末に付けておく。それをみれば分かるように、2010年度調査と同様に、記名式の調査法を採用している。そのため、それは性別、入試区分データや、大学成績データとの対応ができるようなデザインになっている。

また、表1には、本論で用いる用語と、アンケート調査質問文の対応を示しておいた。なお、個別科目に対する評価として、「基礎セルフディベロップメント」については、「興味を持った学問テーマ数」に対する評価がなされている。「基礎セルフディベロップメント」は、通年の授業時間を8クールに分割し、7つの学問分野（哲学、現代学、数理学、世界文学、社会学、地球学、歴史学）の授業を1クールずつ履修し、最終の第8クールでは、それら7学問分野の授業内容を総合する形で成果発表をする、という授業構成になっている科目である。なお、7つの学問分野を学ぶクールでは、ノート・テイキング、情報検索、リーディング、プレゼンテーションなどのアカデミックスキルも学習することになっている。

表1. 変数名とアンケート調査票質問文の対応

	変数名	アンケート調査票質問文	調査該当科目
総合的評価	武蔵野BASIS総合評価	武蔵野BASIS(全学共通基礎課程)は有意義であった	
	学部横断型クラス編成	「仏教概説1」、「健康体育1」、「基礎セルフディベロップメント」、「自己の探求I」での、学部横断型のクラス編成はよかった	
	グループワーク	「基礎セルフディベロップメント」、「自己の探求I」でのグループワークにより、他の人の意見を聴くことができてよかった	
個別科目に対する評価	授業満足度	「〇〇」の授業の内容について満足した	仏教概説1 健康体育1 コンピュータ活用基礎1 日本語リテラシー 外国語(英語/初修外国語) 武蔵野BASIS基礎 基礎セルフディベロップメント 自己の探求I
	授業目的達成度	授業を通して、本学の建学の精神について理解した	仏教概説1
		授業を通して、身体運動の大切さを理解した	健康体育1
		授業を通して、大学での今後の学びに必要なコンピュータスキルが身についた	コンピュータ活用基礎1
		授業を通して、大学での今後の学びに必要な読み書き能力が身についた	日本語リテラシー
		授業を通して、今後も「外国語」の学習をしようとする意欲が高まった	外国語(英語/初修外国語)
		授業を通して、ノートのとり方や図書館の活用法などのアカデミックスキルを身につけることができた	基礎セルフディベロップメント のアカデミックスキル
	授業難易度	授業の難易度は適切であった	コンピュータ活用基礎1 外国語(英語/初修外国語)
	添削課題	添削課題の量は適切であった	日本語リテラシー
	非有用感	このような授業内容が今後どのように役立つのか理解できなかった	武蔵野BASIS基礎
	高校教育との重複性	授業内容が高校時代に習ったことなので大学で学ぶ必要はなかった	武蔵野BASIS基礎
	興味を持った学問テーマ数	授業を通して、興味を持った学問テーマはいくつありましたか	基礎セルフディベロップメント
学生生活	高校までの授業との相違	大学の授業は高校までの授業とは違っていると感じた	
	新聞を読む習慣	新聞をよく読む方である	
	読書習慣	よく読書する方である(マンガ、雑誌を除く)	
	学生生活満足度	大学生活は楽しい	

なお、「武蔵野BASIS基礎」の「非有用感」と「高校教育との重複性」に関する評価のみは、他の授業評価項目とは異なり、「そう思う」の方が、授業に対してネガティブな評価に、「思わない」の方がポジティブな評価になる、といった具合に、逆転評価項目になっている。だから、これら2つの評価項目については、他の授業評価項目との比較で、数値の読み方を容易にするため、「思わない」を4点、「あまり思わない」を3点、「ややそう思う」を2点、「そう思う」を1点に変換し、数値が高いほどプラスの評価になるようにした。

3. 基礎集計結果

表2は、2011年度調査について、授業評価の基礎集計結果を示したものである。

表中の平均値と標準偏差は、「思わない」を1点、「あまり思わない」を2点、「ややそう思う」を3点、「そう思う」を4点に割り当て計算したものである。だから、授業評価の良し悪しが分かれる分岐点は、2.5になる。

そこで、この表では、授業評価の平均値が2.5未満のものには網かけが施してある。また、一つの目安として2.5～2.75と相対的に幾分評価が劣る項目については下線を付けておいた。

表2に示した基礎集計結果をみると、「武蔵野BASIS基礎」に関しては、半数以上の学生が低い評価に留まっている。

2010年度調査では、「日本語リテラシー」とともに「武蔵野BASIS基礎」は、半数以上の学生が低い評価に留まっていた。とくにこれら2科目については、2010年度調査の対象になった学期に比べると、いくつかの改善策が講じられた。それを反映して、授業評価は多少、良好になっている。とくに、「日本語リテラシー」については、半数以上の学生が低い評価に留まる、といった状況からは脱去している。なかでも、その「添削課題」については、大幅な改善がみられる。しかし、「添削課題」を除けば、「日本語リテラシー」は依然、2.75未満と、相対的には低い評価水準に留まっている。のみならず、「武蔵野BASIS基礎」に関しては、半数以上の学生が低い評価に留まる、といった状況からの脱去はみられない。これら2科目については、まだ授業改善課題が残っているといえる。さらに、「仏教概説1」（建学科目）の授業満足度も、相対的には低い評価水準に留まっている。

以上に対する授業評価を除けば、「武蔵野BASIS基礎」を構成する科目については、どの評価項目についても、2.75以上と、良好な評価を得ていることが分かる。さらに、2010年度調査では、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）総合評価」は、過半数の学生が低い評価に留まっていた。それが、2011年度調査では、その状況を脱し、2.75を上回る評価を得ている。「武蔵野BASIS」全体としては、かなりの改善が進んだといえる。

なお、各科目の満足度のみを比較すると、「健康体育1」と、グループワークを中心とした授業形態をとる「自己の探求Ⅰ」の評価がきわめて高い。2010年度調査のときに指摘したように⁶⁾、座学的要素が少ない科目、つまり、じっと座って講義を聞くタイプの授業ではなくなるほど、逆の言い方をすれば、実際に体を動かすことが多くなる科目ほど、高い評価を得ているといった構造は、2011年度調査についても、踏襲されていることが分かる。

表2. 授業評価項目の基礎集計結果

	平均値	標準偏差	思わない	あまり 思わない	やや そう思う	そう思う	計 (%)
(a)「仏教概説1」 満足度	2.67	0.87	9.5	31.1	42.4	17.0	100
(b)「健康体育1」 満足度	3.57	0.63	1.1	4.3	31.2	63.5	100
(c)「コンピュータ活用基礎1」 満足度	2.98	0.79	4.0	19.9	49.7	26.4	100
(d)「日本語リテラシー」 満足度	2.58	0.87	11.3	33.7	41.0	14.0	100
(e)「外国語」(英語／初修外国語) 満足度	3.03	0.83	4.9	18.5	45.2	31.4	100
(f)「武蔵野BASIS基礎」 満足度	2.39	0.85	15.4	38.9	36.9	8.8	100
(g)「基礎セルフディベロップメント」 満足度	2.84	0.82	6.7	23.3	49.5	20.6	100
(h)「自己の探求Ⅰ」 満足度	3.30	0.82	4.2	10.4	36.5	48.9	100
(i)「仏教概説1」 授業目的達成度	2.97	0.73	3.1	18.9	56.0	22.0	100
(j)「健康体育1」 (授業目的達成度)	3.51	0.65	0.9	5.9	34.0	59.2	100
(k)「コンピュータ活用基礎1」 授業目的達成度	3.09	0.77	3.1	15.8	50.2	30.8	100
(l)「コンピュータ活用基礎1」 授業難易度	3.09	0.75	3.0	14.7	52.6	29.8	100
(m)「日本語リテラシー」 授業目的達成度	2.72	0.86	8.5	28.7	44.8	18.0	100
(n)「基礎セルフディベロップメント」の アカデミックスキルの授業目的達成度	2.77	0.80	4.7	25.7	51.9	17.8	100
(o)「日本語リテラシー」 添削課題	3.14	0.84	5.7	29.0	47.9	17.4	100
(p)「外国語」(英語／初修外国語) 授業目的達成度	2.98	0.81	3.9	17.0	39.9	39.1	100
(r)「外国語」(英語／初修外国語) 授業難易度	2.83	0.77	5.3	17.5	50.8	26.4	100
(s)「武蔵野BASIS基礎」 非有用感なし	2.31	0.86	18.7	38.9	35.0	7.5	100
(t)「武蔵野BASIS基礎」 高校教育との重複性なし	2.42	0.91	18.1	32.2	39.1	10.6	100
(u) 学部横断型クラス編成	3.49	0.66	1.3	5.5	35.7	57.5	100
(v) グループワーク	3.59	0.60	1.0	2.9	31.8	64.3	100
(W) 武蔵野BASIS総合評価	2.75	0.81	7.2	27.1	49.3	16.5	100

	平均値	標準偏差	0分野	1分野	2～3 分野	4～7 分野	計 (%)
(x) 基礎セルフディベロップメントの 興味をもった学問分野数	2.41	1.14	3.6	15.8	72.6	7.9	100

表注) ①(x)の平均値・標準偏差については、「2～3分野」は「2.5分野」、「4～7分野」は「5.5分野」の数値を割り当てて計算している。

②網かけは、2.5未満の数字。下線は、2.5～2.75の数字。

4. 授業評価に対する学生の意識の構造

つぎに表3は、各授業評価項目間の相関係数をデータとして、それを因子分析にかけ、統計的に要約した結果である。表中の数値は、その値が大きいほど、よく似た授業評価を受けていることを表している。高い数値を示した項目には、網かけが施してある。濃い網かけがなされている項目は、よく似た授業評価を受けているといった意味で、グループ、専門用語を用いれば「因子」を形成していることを示している。また、薄い網かけは、濃い網かけほどの影響力はないものの、別の因子を構成する要素ともなっていることを意味している。

第1因子は、「武蔵野BASIS基礎」を軸とする因子となっている。さらに、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）総合評価」も、この因子の構成要素になっている。この点については、後に詳述する。

第3因子は、「仏教概説1（建学科目）」と「基礎セルフディベロップメント」との、2科目を構成要素としている。このことは、「仏教概説1」（建学科目）に対して高い授業評価を与えている学生ほど、「基礎セルフディベロップメント」に対しても、高い授業評価を与えている。その意味で、これら2科目は、学生からよく似た科目と評価されていることを示している。

第3因子を例外として、第4因子は「外国語」（英語／初修外国語）、第5因子は「日本語リテラシー」、第6因子は「コンピュータ活用基礎1」、第7因子は「健康体育1」といった具合に、各科目ごとに因子が抽出されている。

第2因子は、「学部横断型クラス編成」と「グループワーク」に対する評価を軸とする因子となっている。そして、その典型的の科目が、「自己の探求Ⅰ」であり、その意味では、第2因子は、科目としては基本的には「自己の探求Ⅰ」を軸とする因子であるとみなせる。さらに、「基礎セルフディベロップメント」も、それに多少近い要素をもつ科目と、学生は評価している。「学部横断型クラス編成」、あるいは「グループワーク」形式の授業形態を採用している科目は、これら2科目に限られない。にもかかわらず、それらの科目は第2因子の構成要素となっていない。ここで注目すべきことは、「学部横断型クラス編成」と「グループワーク」とが、別の因子として抽出されるのではなく、同じ因子上に出現していることである。この点は、学生たちが、「学部横断型クラス編成」と「グループワーク」とを結びつけ、セットとして捉えていることを示唆している。その影響で、第2因子を構成する科目は、「自己の探求Ⅰ」と「基礎セルフディベロップメント」になっているものと思われる。換言すれば、「学部横断型クラス編成」および「グループワーク」といった言葉を聞いたときに、学生たちが強力にイメージする科目は、それら両方の授業形態が併用されている、「自己の探求Ⅰ」と「基礎セルフディベロップメント」、とくに前者であることを示している。

ところで、2010年度調査の結果をもとにして、学生の意識としては、授業評価はつぎのような構造をもつ可能性を指摘した⁷⁾。つまり、それぞれの科目に対する総合的授業評価（好感度）が、授業内容・授業形態に対する評価より、重要な意味をもっている。平易な言い方をすれば、総合的授業評価（好感度）が高い科目、すなわち好きな科目ほど、その科目で展開されている授業内容・授業形態に関する個別の授業評価項目も、他の科目に比べて相対的に高く評価する傾向がある。そのような評価構造が存在する可能性についてである。

表 3. 授業評価項目の因子分析の結果

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
	「武蔵野BASIS基礎」	グループワーク ＋ 学部横断型 クラス編成	「仏教概説1」・ 「基礎セルフ ディベロップメント」	「外国語」 (英語／初修 外国語)	「日本語 リテラシー」	「コンピュータ活用 基礎1」	「健康体育1」
武蔵野BASIS(全学共通基礎課程)満足度	0.523	0.341	0.303	0.067	0.206	0.125	0.074
学部横断型クラス編成	-0.003	0.754	0.019	0.072	0.067	0.063	0.099
グループワーク	0.022	0.804	0.089	0.089	0.043	0.072	0.049
「仏教概説1」満足度	0.156	0.051	0.786	0.113	0.042	0.069	0.057
「健康体育1」満足度	0.081	0.245	0.046	0.040	-0.002	0.021	0.809
「コンピュータ活用基礎1」満足度	0.128	0.093	0.177	0.123	0.064	0.788	0.073
「日本語リテラシー」満足度	0.209	0.128	0.208	0.056	0.770	0.085	0.062
「外国語」(英語／初修外国語)満足度	0.105	0.120	0.163	0.827	0.044	0.108	0.032
「武蔵野BASIS基礎」満足度	0.650	0.129	0.333	0.094	0.206	0.160	0.062
「基礎セルフディベロップメント」満足度	0.293	0.465	0.525	0.056	0.158	0.056	-0.010
「自己の探求Ⅰ」満足度	0.167	0.644	0.137	0.068	0.061	0.059	0.065
「仏教概説1」授業目的達成度	0.059	0.003	0.728	0.155	0.169	0.073	0.100
「健康体育1」授業目的達成度	0.042	-0.013	0.129	0.089	0.101	0.051	0.840
「コンピュータ活用基礎1」授業目的達成度	0.009	0.045	0.111	0.109	0.146	0.815	0.057
「コンピュータ活用基礎1」授業難易度	0.073	0.091	0.006	0.159	0.094	0.773	-0.040
「日本語リテラシー」授業目的達成度	0.101	0.028	0.161	0.064	0.811	0.128	0.125
「日本語リテラシー」添削課題	0.133	0.089	0.063	0.153	0.748	0.106	-0.055
「外国語」(英語／初修外国語)授業目的達成度	0.008	0.094	0.104	0.809	0.153	0.113	0.058
「外国語」(英語／初修外国語)授業難易度	0.094	0.052	0.081	0.790	0.072	0.178	0.058
「武蔵野BASIS基礎」非有用感なし	0.786	0.048	0.073	0.040	0.143	0.042	0.029
「武蔵野BASIS基礎」高校教育との重複性なし	0.784	0.012	0.044	0.066	0.052	0.016	0.037
「基礎セルフディベロップメント」の アカデミックスキルの授業目的達成度	0.122	0.247	0.552	0.072	0.175	0.149	0.059

因子抽出法: 主成分分析。

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。

具体的にいうと、複数の科目で、たとえば同じような「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」が採用されていたとしよう。その場合、2010 年度調査の結果をもとにしていえば、とある科目の「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」といった授業内容・授業形態を高く評価している学生は、別の科目の「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」を、必ずしも同一に高く評価するわけではない。好きな科目であれば、「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」といった授業内容・授業形態に対する評価も高くなり、嫌いな科目であれば、それらの評価も低くなる。そのように、むしろ科目の好感度に引きずられる傾向が強い。そのような傾向がみられるということである。

この傾向は、2011 年度調査については、より鮮明な形で現れている。表 3 をみると、科目ごとに因子が抽出されているからである。

なお、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）総合評価」は、「武蔵野BASIS基礎」と同じ第 1 因子に現れている。このことは、「武蔵野BASIS基礎」に対する評価が、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）」全体に対する総合評価に強く結びついていることを表している⁸⁾。

ところで、各科目の授業満足度だけを変数とする、因子分析も行ってみた。その結果としては、1 因子（ジェネラル・ファクター）しか抽出されなかった。このことは、各科目の授業満足度だけを取り出した場合、どの科目に対しても、同じ程度の授業満足度評定を下している学生が多い。つまり、一つの科目に対する授業満足度が高い学生は、他のすべての科目に対しても、授業満足度が高い傾向のあることを示唆している。

5. 学生生活意識

それでは、学生生活意識と授業評価とのあいだには、どのような関係がみられるのであろうか。その分析に進む前に、表 4 でまず、学生生活意識についての基礎集計結果を確認しておこう。

「そう思う」と「ややそう思う」との合計の数値でみていけば、「大学生活は楽しい」と感じている学生は 9 割以上に達し、「大学生活満足度」は、きわめて良好であることが分かる。また、「高校までの授業との相違」を意識している学生も、85%を超えている。しかし、「読書習慣」を身につけている学生は 45%を切り、過半数を割っている。「新聞をよく読む方である」とは「思わない」学生は約 4 割に達し、「あまり思わない」学生まで含めると 7 割近くの学生は、「新聞を読む習慣」を身につけていない。読書・新聞を含めて、活字離れは明らかである。

表は割愛するものの、「学生生活意識」項目間の相関係数をみると、「読書習慣」と「新聞を読む習慣」とのあいだには、0.445 と、やや高い相関がみられた（参考のために、表 5 に、クロス集計表を載せておく）。つまり、「読書習慣」をもっている学生ほど、「新聞を読む習慣」も身につけている傾向がみられる。また、「高校までの授業との相違」意識と「大学生活満足度」とのあいだには、0.215 と、弱い相関がみられた。つまり、「高校までの授業との相違」を認識している学生ほど、大学生活への適応度が高い傾向がみられることになる。その他の「学生生活意識」項目間には、相関関係はみられなかった。

表 4. 学生生活意識の基礎集計結果

	平均値	標準偏差	思わない	あまり 思わない	やや そう思う	そう思う	計 (%)
(a) 高校までの授業との相違	3.35	0.78	2.2	12.2	33.7	51.8	100
(b) 新聞を読む習慣	1.89	0.87	38.4	40.0	16.3	5.3	100
(c) 読書習慣	2.42	0.97	18.6	37.1	28.5	15.8	100
(d) 学生生活満足度	3.42	0.68	1.2	7.0	39.9	51.9	100

表 5. 「読書習慣」と「新聞を読む習慣」

		新聞を読む習慣				
		思わない	あまり 思わない	やや そう思う	そう思う	計
読 書 習 慣	思わない	85.8	9.6	2.9	1.7	100% (240人)
	あまり思わない	34.6	52.3	11.0	2.1	100% (480人)
	ややそう思う	23.8	45.0	26.0	5.1	100% (369人)
	そう思う	17.6	37.7	27.0	17.6	100% (204人)

つぎに、「学生生活意識」と一年生時総合成績との関係についてみておこう。一年生時総合成績については、GPA を指標として用いることにした。なお、武蔵野大学の成績評価は、「S」、「A」、「B」、「C」、「D」、「X」の 6 段階評価でなされている。「S」～「C」は、その順に高い成績を得た合格評価となっている。「D」は不合格、「X」は出席不良評価である。GPA は、これらの評価をもとに、「S」～「C」にはそれぞれ 4～1 点、「D」、「X」は 0 点に換算し、単位数のウェイトを付けて、平均値を算出したものである。

この一年生時総合成績（GPA）を用いた解析については、以下の点の注意が必要である。

第 1 に、一年生時総合成績は、「武蔵野 B A S I S」科目に分類される以外の科目も、含み込まれたものになっていることである。

第 2 に、武蔵野大学では、1 年生時必須科目のなかでも、「進級基準科目」と呼ばれる、特定の科目について不合格判定を受けた場合は、2 年生に進級できない。そのため、これら「進級基準科目」の単位取得に失敗した学生は、次年度には、1 年生に留め置きされる仕組みになっている。今回提供を受けた成績データは、それら留年確定者が含まれていない。よって、これら学生については、成績データは欠損値になっている。

この GPA を指標として、「読書習慣」、「新聞を読む習慣」、「高校までの授業との相違」意

識、「大学生生活満足度」といった、4つの学生生活意識項目についてそれぞれ、「そう思う」＋「ややそう思う」と答えた学生群と、「あまり思わない」＋「思わない」と答えた学生群に分けて、一年生時総合成績（GPA）の平均値を算出してみた。以下、前者の学生群を「学生生活高評価群」、後者の学生群を「学生生活低評価群」と呼ぶことにする。なお、「新聞を読む習慣」については、その習慣がない学生が圧倒的に多いという、度数の分布を考慮して、以下の分析ではすべて、「そう思う」＋「ややそう思う」＋「あまり思わない」と、「思わない」とで分割し、前者を「学生生活高評価群」に、後者を「学生生活低評価群」に割り当てることにした。

その結果を示したものが、表6である。「大学生生活満足度」の高い学生の方が、その低い学生より、1%の有意水準で、一年生時総合成績（GPA）は明らかによい傾向がみられる。「高校までの授業との相違」についても、有意差は確認されなかったものの、その意識の高い学生の方が、その低い学生より、一年生時総合成績（GPA）はよい傾向がみられる。

「読書習慣」および「新聞を読む習慣」については、その習慣の有無で、一年生時総合成績（GPA）の高低に差はまったく観察されない。ただし、これはあくまで、1年生時に履修する科目に限定される結果であり、2年生以降に履修することになる科目に関しても、同じ傾向がみられるのかどうかについては、今後の課題となる。

6. 学生生活意識と授業評価との関係

それでは、学生生活意識と授業評価とのあいだには、何らかの関係がみられるのであろうか。「読書習慣」、「新聞を読む習慣」、「高校までの授業との相違」意識、「大学生生活満足度」といった学生生活意識についてそれぞれ、「学生生活高評価群」と「学生生活低評価群」とに分けて、授業評価の平均値を算出してみた。

表6. 「学生生活意識」と一年生時総合成績（GPA）

	GPA平均値			GPA標準偏差		
	学生生活 高評価群		学生生活 低評価群	学生生活 高評価群		学生生活 低評価群
(a) 高校までの授業との相違	2.81		2.77	0.443		0.468
(b) 新聞を読む習慣	2.80		2.81	0.451		0.440
(c) 読書習慣	2.81		2.80	0.458		0.438
(d) 大学生生活満足度	2.82	>>	2.66	0.444		0.460

表注) ①(b)新聞を読む習慣については、度数の分布を考慮して、「そう思う」＋「ややそう思う」＋「あまり思わない」と、「思わない」とで分割し、前者を「学生生活高評価群」に、後者を「学生生活低評価群」に割り当てた。

(b)以外の項目については、「そう思う」＋「ややそう思う」と、「あまり思わない」＋「思わない」とでの分割となっている。

②二重の不等号は、 $P<0.01$ 。一重の不等号は、 $P<0.05$ 。

その結果、まず「高校までの授業との相違」については、その認識の高い学生の方が、そうでない学生より、どの授業評価項目をみても、好意的な評価をいただいている傾向が観察された。しかも、その平均値の差については、いずれも1%水準での有意差がみられた。なお、「武蔵野BASIS基礎」は、リメディアル（高校の授業の補修）的性格を有する科目である。にもかかわらず、「高校までの授業との相違」意識の高い学生の方が、「高校教育との重複性」についてさえ、それが少ないと感じていることは興味深い。その種の意識の高い学生ほど、いかにリメディアル（高校の授業の補修）的な授業内容であっても、それを大学教育レベルの学びへと、自分なりに問題関心を高めている可能性のあることが示唆される。

同様に、「大学生活満足度」については、その満足度の高い学生の方が、そうでない学生より、「武蔵野BASIS基礎」の「非有用感」および「高校教育との重複性」、「健康体育1」の授業目的達成度」への評価を除いて、どの授業評価項目をみても、1%の有意水準で、好意的な評価をいただいている傾向が観察された。

それでは、「新聞を読む習慣」、「読書習慣」については、どうであろうか。表7、表8でみていこう。

表7に示したように、「武蔵野BASIS基礎」については、1%の有意水準で明らかに、「新聞を読む習慣」のない学生の方が、その習慣を有する学生より、「高校教育との重複性」を感じず、「有用感」をいただいている。同様に、表8に示したように、「読書習慣」を有する学生の方が、有意差こそ認められないものの、「健康体育1」満足度」に関してだけは、評価が芳しくない。これらを例外として、表7、表8をみると、有意差を考慮しなければ、どの項目についても、「読書習慣」・「新聞を読む習慣」ともに、その習慣を有する学生の方が、そうでない学生より、武蔵野BASISを構成するどの授業科目も好意的に評価している。

つぎに、有意差がみられる項目についてみていこう。

まず、表7をみると、「学部横断型クラス編成」、「健康体育1」満足度」、「外国語」（英語／初修外国語）授業難易度」については、「新聞を読む習慣」の有無で、授業評価における差は観察されない。また、「グループワーク」、「健康体育1」授業目的達成度」については、「新聞を読む習慣」を有する学生の方が、そうでない学生より、好意的な評価をいただいている。ただし、その有意差は、5%にすぎない。以上と、先述した「武蔵野BASIS基礎」への評価を除けば、どの科目の授業評価項目をとっても、「新聞を読む習慣」を有する学生の方が、そうでない学生より、1%の有意水準で明らかに、好意的な評価をいただいている。同様に、「基礎セルフディベロップメント」の「興味を持った学問テーマ数」についても、「新聞を読む習慣」のある学生の方が、多くの学問分野に興味をもてた、と評価している。

つまり、授業評価の高低が、授業適応度を表しているとすれば、学生に「新聞を読む習慣」を身につけさせることは、学生の授業適応度を高める可能性のある点を示唆している。

さらに、標準偏差に着目すれば、有意差は認められないものの『武蔵野BASIS基礎』高校教育との重複性なし」と、5%の有意水準で『武蔵野BASIS基礎』満足度」とで、「新聞を読む習慣」を有する学生群の方が、そうでない学生群より、授業評価に対するバラツキが大きい。しかし、それ以外の授業評価項目については、いずれもその逆の傾向がみられる。しかも、ほとんどの授業評価項目について、1%水準の有意差が認められる。

表 7. 新聞を読む習慣と授業評価の関係

	平均値			標準偏差		
	新聞を読む習慣 高		新聞を読む習慣 低	新聞を読む習慣 高		新聞を読む習慣 低
武蔵野BASIS(全学共通基礎課程) 満足度	2.88	>>	2.55	0.770	<<	0.840
学部横断型クラス編成	3.51		3.47	0.635	<	0.704
グループワーク	3.62	>	3.55	0.564	<<	0.653
「仏教概説1」 満足度	2.77	>>	2.50	0.822	<<	0.911
「健康体育1」 満足度	3.58		3.55	0.605	<	0.665
「コンピュータ活用基礎1」 満足度	3.05	>>	2.87	0.754	<<	0.833
「日本語リテラシー」 満足度	2.73	>>	2.34	0.838		0.858
「外国語」(英語／初修外国語) 満足度	3.09	>>	2.94	0.789	<	0.891
「武蔵野BASIS基礎」 満足度	2.51	>>	2.19	0.847	>	0.819
「基礎セルフディベロップメント」 満足度	2.95	>>	2.67	0.784	<<	0.858
「自己の探求Ⅰ」 満足度	3.36	>>	3.21	0.785		0.862
「仏教概説1」 授業目的達成度	3.02	>>	2.88	0.717	<	0.742
「健康体育1」 授業目的達成度	3.55	>	3.46	0.628	<<	0.683
「コンピュータ活用基礎1」 授業目的達成度	3.16	>>	2.98	0.711	<	0.835
「コンピュータ活用基礎1」 授業難易度	3.15	>>	3.00	0.716		0.785
「日本語リテラシー」 授業目的達成度	2.83	>>	2.54	0.818	<<	0.883
「日本語リテラシー」 添削課題	2.83	>>	2.67	0.782	<<	0.815
「外国語」(英語／初修外国語) 授業目的達成度	3.20	>>	3.05	0.780	<	0.913
「外国語」(英語／初修外国語) 授業難易度	3.01		2.93	0.786	<	0.839
「武蔵野BASIS基礎」 非有用感なし	2.60	<<	2.82	0.848		0.861
「武蔵野BASIS基礎」 高校教育との重複性なし	2.51	<<	2.68	0.904		0.897
「基礎セルフディベロップメント」 アカデミックスキルの授業目的達成度	2.92	>>	2.69	0.711	<<	0.835
「基礎セルフディベロップメント」 興味を持った学問テーマ数	2.93	>>	2.72	0.551	<<	0.652

表注) ①二重の不等号は、 $P<0.01$ 。一重の不等号は、 $P<0.05$ 。

②「基礎セルフディベロップメント」興味を持った学問テーマ数については、「2～3分野」は「2.5分野」、「4～7分野」は「5.5分野」の数値を割り当てて計算している。

このことは、以下の点を示唆している。つまり、「新聞を読む習慣」を有する学生群は基本的には、武蔵野BASIS科目の授業適応度が高い。これに対し、「新聞を読む習慣」のない学生のなかには、武蔵野BASIS科目の授業適応度が低い学生群と、高い学生群が混在している傾向がみられることである。

2010年度調査の結果をもとにすれば、授業を高く評価しているという意味で、授業適応度が高い学生ほど、一年生時総合成績（GPA）はよい可能性が強い⁹⁾。だとすれば、「新聞を読む習慣」のない学生のなかにも、一年生時総合成績（GPA）の高い学生が、かなり存在することになる。それが影響して、先に表6のところで指摘したように、「新聞を読む習慣」の有無によって、一年生時総合成績（GPA）に差の認められなかった可能性が高い。

いずれにせよ、こうしてみると、授業適応度が高く、成績もよい学生、つまり向学心の強い学生のなかにも、「新聞を読む習慣」のない学生が多数存在することは確かであると思われる。そしてそれは、大学生として「新聞を読む習慣」を身につけさせることが重要であるとするれば、深刻な状況といえる。だとすると、とくにそれら学生の目をいかに新聞に向けさせるかは、今後の大学教育における、一つの課題として浮かび上がってくることになる。

それでは、「読書習慣」についてはどうであろうか。表8でみていこう。

第1に、「読書習慣」をもつ学生ほど、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）」への総合的な満足度は高い。

科目別にみていくと、第2に、「健康体育1」、「コンピュータ活用基礎1」、「『外国語』（英語／初修外国語）」では、それら科目に関する授業評価項目については、その評価の高低に、「読書習慣」の有無による差は認められない。「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」に対する評価についても同様である。さらに、自己啓発的な科目である「自己の探求Ⅰ」についても、5%水準での有意差しか観察されない。具体的な授業内容にまで立ち入らないと正確な判断は下せないとしても、これらの科目の特性を考えれば、ある程度、当然の結果とみなせる。

第3に、「読書習慣」をもつ学生ほど、「仏教概説1」、「日本語リテラシー」、「基礎セルフディベロップメント」への授業評価は、どの授業評価項目に対しても高い。「基礎セルフディベロップメント」の「興味を持った学問テーマ数」についても、「読書習慣」のある学生の方が、多くの学問分野に興味をもてた、と評価している。

同様に、「武蔵野BASIS基礎」については、「非有用感」・「高校教育との重複性」といった授業内容についての評価については、有意差は認められないものの、「満足度」については、明らかに「読書習慣」のある学生の方が、好印象をもっている。

2010年度調査の結果をもとにすれば、「武蔵野BASIS基礎」の授業評価が、他の科目に比べ、きわめて悪い原因の一つは、一年生時総合成績（GPA）の良くない学生からの評判が、とくに悪い可能性のあることが示唆された¹⁰⁾。今回の結果も考え合わせると、勉学・教養に関するモチベーションが低いのみならず、「高校までの授業との相違」意識の低い学生が、「武蔵野BASIS基礎」に対する不満分子の中心になっていることが示唆される。

表 8. 読書習慣と授業評価の関係

	平均値			標準偏差		
	高読書習慣群		低読書習慣群	高読書習慣群		低読書習慣群
武蔵野BASIS(全学共通基礎課程)満足度	2.83	>>	2.68	0.812		0.808
学部横断型クラス編成	3.50		3.49	0.676		0.652
グループワーク	3.62		3.57	0.599		0.602
「仏教概説1」満足度	2.76	>>	2.60	0.835	<<	0.887
「健康体育1」満足度	3.54		3.60	0.656	>	0.605
「コンピュータ活用基礎1」満足度	3.03		2.95	0.768		0.805
「日本語リテラシー」満足度	2.72	>>	2.46	0.868		0.847
「外国語」(英語／初修外国語)満足度	3.05		3.02	0.831		0.835
「武蔵野BASIS基礎」満足度	2.48	>>	2.32	0.876	>	0.824
「基礎セルフディベロップメント」満足度	2.93	>>	2.77	0.803	<<	0.835
「自己の探求Ⅰ」満足度	3.36	>	3.25	0.787		0.840
「仏教概説1」授業目的達成度	3.04	>>	2.91	0.735		0.722
「健康体育1」授業目的達成度	3.54		3.49	0.643		0.657
「コンピュータ活用基礎1」授業目的達成度	3.13		3.05	0.751		0.775
「コンピュータ活用基礎1」授業難易度	3.13		3.06	0.744		0.747
「日本語リテラシー」授業目的達成度	2.83	>>	2.64	0.847	<	0.852
「日本語リテラシー」添削課題	2.89	>>	2.68	0.804		0.783
「外国語」(英語／初修外国語)授業目的達成度	3.16		3.13	0.843		0.831
「外国語」(英語／初修外国語)授業難易度	2.99		2.98	0.824		0.795
「武蔵野BASIS基礎」非有用感なし	2.42	>>	2.23	0.873		0.840
「武蔵野BASIS基礎」高校教育との重複性なし	2.48		2.38	0.935		0.879
「基礎セルフディベロップメント」アカデミックスキルの授業目的達成度	2.85		2.81	0.763		0.773
「基礎セルフディベロップメント」興味を持った学問テーマ数	2.61	>>	2.25	1.153	<<	1.095

表注) ①二重の不等号は、 $P<0.01$ 。一重の不等号は、 $P<0.05$ 。

②「基礎セルフディベロップメント」興味を持った学問テーマ数については、「2～3分野」は「2.5分野」、「4～7分野」は「5.5分野」の数値を割り当てて計算している。

7. 本論のまとめ

最後に、本章で得られた知見のまとめを行っておこう。

(1) 授業評価に関する基礎集計結果

① 各科目の満足度のみを比較すると、「健康体育1」と、グループワークを中心とした授業形態をとる「自己の探求Ⅰ」の評価がきわめて高い。2010年度調査のときに指摘したように、座学的要素が少ない科目、つまり、じっと座って講義を聞くタイプの授業ではなくなるほど、逆の言い方をすれば、実際に体を動かすことが多くなる科目ほど、高い評価を得ているといった構造が、2011年度調査についてもみられる。

② 2010年度調査では、「日本語リテラシー」とともに「武蔵野BASIS基礎」は、半数以上の学生が低い評価に留まっていた。これら2科目については、2010年度調査の対象になった学期に比べると、いくつかの改善策が講じられた。それを反映して、授業評価は多少、良好になっている。とくに、「日本語リテラシー」については、半数以上の学生が低い評価に留まる、といった状況からは脱去している。なかでも、その「添削課題」については、大幅な改善がみられる。しかし、「添削課題」を除けば、「日本語リテラシー」は依然、2.75未満と、相対的には低い評価水準に留まっている。のみならず、「武蔵野BASIS基礎」に関しては、半数以上の学生が低い評価に留まる、といった状況からの脱去はみられない。これら2科目については、まだ授業改善課題が残っているといえる。

③ ②に示した授業評価項目、および『仏教概説1』（建学科目）満足度」に対する評価を除けば、「武蔵野BASIS基礎」を構成する科目については、どの評価項目についても、2.75以上と、良好な評価を得ていた。さらに、2010年度調査では、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）総合評価」は、過半数の学生が低い評価に留まっていた。それが、2011年度調査では、その状況を脱し、2.75を上回る評価を得ている。「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）」全体としては、かなりの改善が進んだといえる。

(2) 授業評価の構造

④ 2010年度調査の結果をもとにして、学生の意識としては、授業評価はつぎのような構造をもつ可能性を指摘した。つまり、それぞれの科目に対する総合的授業評価（好感度）が、授業内容・授業形態に対する評価より、重要な意味をもっている。平易な言い方をすれば、総合的授業評価（好感度）が高い科目、すなわち好きな科目ほど、その科目で展開されている授業内容・授業形態に関する個別の授業評価項目も、他の科目に比べて相対的に高く評価する傾向がある。そういった評価構造が存在する可能性についてである。

そのような傾向は、2011年度の調査について、各授業評価項目間の相関係数をデータとして、それを因子分析にかけた結果では、より鮮明な形で現れている。なぜなら、基本的には、各科目ごとに因子が抽出されているからである。

⑤「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）」に対する「総合評価」にもっとも大きな影響を与えているのは、「武蔵野BASIS基礎」に対する評価であった。このことは、何より「武蔵野BASIS基礎」に対する評価を上げることができれば、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）総合評価」は、さらに上昇させることができる点を示唆している。

(3) 学生生活意識

⑥ (a)「大学生活は楽しい」と感じている学生は9割以上に達し、「大学生活満足度」は、きわめて良好であることが分かった。また、(b)「高校までの授業との相違」を意識している学生も、85%を超えている。しかし、(c)「読書習慣」を身につけている学生は45%を切り、過半数を割っている。(d)「新聞をよく読む方である」とは「思わない」学生は約4割に達し、「あまり思わない」学生まで含めると7割近くの学生は、「新聞を読む習慣」を身につけていない。読書・新聞を含めて、活字離れは明らかである。

⑦「学生生活意識」項目間の相関係数をみると、「読書習慣」と「新聞を読む習慣」とのあいだには、0.445と、やや高い相関がみられた。つまり、「読書習慣」をもっている学生ほど、「新聞を読む習慣」も身につけている傾向がみられる。また、「高校までの授業との相違」意識と「大学生活満足度」とのあいだには、0.215と、弱い相関がみられた。つまり、「高校までの授業との相違」を認識している学生ほど、大学生活への適応度が高い傾向がみられることになる。

⑧ (a)「大学生活満足度」の高い学生の方が、その低い学生より、1%の有意水準で、一年生時総合成績（GPA）は明らかによい傾向がみられた。(b)「高校までの授業との相違」についても、有意差は確認されなかったものの、その意識の高い学生の方が、その低い学生より、一年生時総合成績（GPA）はよい傾向がみられた。(c)「読書習慣」および「新聞を読む習慣」については、その高低で、一年生時総合成績（GPA）に、差はまったく観察されなかった。ただし、とくに(c)に関していえば、それはあくまで、1年生時に履修する科目に限定される結果であり、2年生以降に履修することになる科目に対しても、同じ傾向がみられるのかどうかについては、今後の課題となる。

(4) 学生生活意識と授業評価との関係

⑨「高校までの授業との相違」については、その認識の高い学生の方が、そうでない学生より、どの授業評価項目に対しても、好意的な評価をしている傾向が観察された。しかも、その平均値の差については、いずれも1%水準での有意差がみられた。

この結果は、大学の授業が高校までの授業といかに異なるかを、自覚させることの重要性を示唆しているといえる。

⑩ 同様に、「大学生活満足度」については、その高い学生の方が、そうでない学生より、ごく少数の例外を除いて、どの授業評価項目をみても、1%の有意水準で、好意的な評価を

いただいている傾向が観察された。

冒頭で述べたように、「大学生生活満足度」は、④大学での授業に対する全般的な満足度のみならず、⑤大学での友人との交友関係満足度、の2つの要素によって規定されていることが分かっている。上の結果は、④の要因によってもたらされた、と解釈することも当然ながら可能である。つまり、多くの科目の授業に対して好印象をもっている学生ほど、「大学生生活満足度」が高まる傾向がみられる、との解釈である。しかし、逆の因果関係を想定することも可能である。つまり、「大学生生活満足度」が高い学生ほど、多くの授業に対する好感度が高まっている可能性である。その場合に問題になってくる点は、⑤の要素である。つまり、大学のなかで友人との良好な交友関係の構築に失敗しているがゆえに、「大学生生活満足度」が低い学生は、大学での授業も面白くなっている可能性がある。だとすれば、大学でのこのような授業適応の問題を改善・解決するためには、大学のなかにおける良好な交友関係の構築促進が、場合によっては、重要な課題の一つとして浮かび上がってくる可能性も示唆される。ただし、この点については、さらなる解析が必要であり、今後の課題としたい。

⑪ 第1に、有意差を考慮しなければ、基本的にはどの項目についても、「読書習慣」・「新聞を読む習慣」ともに、その習慣のある学生の方が、武蔵野BASIS科目のどの授業も好意的に評価している。

第2に、1%の有意水準で、差がみられる項目についてみていくと、つぎのような結果がみられた。

(a)「新聞を読む習慣」についてみれば、「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」、「『健康体育1』満足度」、および「『外国語』(英語／初修外国語) 授業難易度」については、「新聞を読む習慣」の有無で、評価の差は観察されない。しかし、以上、および⑫で後述する「武蔵野BASIS基礎」に対する評価を除けば、どの科目の授業評価項目をとっても、「新聞を読む習慣」を有する学生の方が、そうでない学生より、明らかに好意的な評価をいただいている。同様に、「基礎セルフディベロップメント」の「興味を持った学問テーマ数」についても、「新聞を読む習慣」を有する学生の方が明らかに、多くの学問分野に興味をもてた、と評価している。

(b)「読書習慣」については、「健康体育1」、「コンピュータ活用基礎1」、「『外国語』(英語／初修外国語)」では、それら科目に関する授業評価項目については、その評価の高低に、「読書習慣」の有無による差は認められない。「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」に対する評価についても同様である。さらに、自己啓発的な科目である「自己の探求I」についても、5%水準での有意差しか観察されない。

以上を総合すると、「健康体育1」、および「学部横断型クラス編成」、「グループワーク」に対する評価に、「読書習慣」・「新聞を読む習慣」の有無による差は、基本的に認められないことになる。これらの科目の特性を考えれば、当然の結果とみなせる。

それに対し、「読書習慣」をもつ学生ほど、「仏教概説1」、「日本語リテラシー」、「基礎セルフディベロップメント」への授業評価は、基本的にはどの評価項目に対しても、明らかに高い。「基礎セルフディベロップメント」の「興味を持った学問テーマ数」についても、「読

書習慣」をもつ学生の方が明らかに、多くの学問分野に興味をもてた、と評価している。

(c)「読書習慣」・「新聞を読む習慣」ともに、その習慣をもつ学生ほど、「武蔵野BASIS（全学共通基礎課程）」への総合的な満足度は高い。

⑫「武蔵野BASIS基礎」については、「新聞を読む習慣」のない学生の方が、「高校教育との重複性」を感じず、「有用感」をいだいていることは確かである。しかし、その点を例外とすれば、「武蔵野BASIS基礎」の授業評価が、他の科目に比べ、きわめて悪い原因の一つは、「読書習慣」を身につけていないという意味で、勉学の発展や教養に対するモチベーションが低いのみならず、「高校までの授業との相違」意識が低く、しかも一年生時総合成績（GPA）の良くない学生が、この科目に対する不満分子の中心になっていることが示唆された。なお、「武蔵野BASIS基礎」は、リメディアル（高校の授業の補修）的性格を有する科目である。にもかかわらず、「高校までの授業との相違」意識の高い学生の方が、「高校教育との重複性」についてさえ、それが少ないと感じていることは興味深い。その種の意識の高い学生ほど、いかにリメディアル（高校の授業の補修）的な授業内容であっても、それを大学教育レベルの学びへと、自分なりに問題関心を高めている可能性のあることが示唆される。

⑬さらに、標準偏差に着目すれば、「新聞を読む習慣」を有する学生群のきわめて多くは、武蔵野BASIS科目の授業適応度（授業評価）が高い。これに対し、「新聞を読む習慣」のない学生のなかには、武蔵野BASIS科目の授業適応度が低い学生と、高い学生が混在している傾向がみられる。

「新聞を読む習慣」のない学生のなかにも、授業適応度が高く、かつ一年生時総合成績（GPA）の高い学生、つまり向学心の強い学生が、かなり存在することになる。それが影響して、「新聞を読む習慣」の有無によって、一年生時総合成績（GPA）に差の認められなかった可能性が高い。

いずれにせよ、向学心の強い学生のなかにも、「新聞を読む習慣」のない学生が多数存在することは確かであると思われる。そして、大学生として「新聞を読む習慣」を身につけさせることが重要だとすれば、それら学生の目をいかに新聞に向けさせるかは、今後の大学教育における、一つの課題として浮かび上がってくることになる。

<註>

1) 「武蔵野BASIS」の具体的中身、およびその導入の経緯については、以下の①の論文に詳しい紹介があるので、そちらを参照されたい。

①久富健「全学基礎教育課程：《武蔵野BASIS》の生成に至るまで―“教養教育”の新たな構築と展開―」、『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第1号、2011年。

2) 岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣「武蔵野大学全学基礎教育課程に関する授業評価についての分析」、『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第2号、2012年。

3) 本文で以下に示す点以外の主要な変更・追加点は、次のとおりである。「武蔵野BASIS基礎」は、

授業内容としては、社会科学と自然科学に分かれて構成されているものの、いずれもリメディアル（高校の授業の補修）的性格を有する授業であるという意味では、共通性がきわめて高い。それを反映して、2010年度調査をもとにすれば、学生たちも、社会科学と自然科学といった分野を超えて、ほぼ同じ性格をもつ授業と認識していた。そこで、2011年度調査では、社会科学と自然科学の区別をなくし、統合した形での授業評価を行うことにした。

- 4) 岩田弘三「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」、『大学教育研究』第7号、神戸大学・大学教育研究センター、1999年、P.4。
- 5) 前掲、岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣、2012年。
- 6) 同論文。
- 7) 同論文。
- 8) 2010年度調査では、「武蔵野BASIS総合評価」は、以下の2つの要素で構成されていた。一つが、「基礎セルフディベロップメント」の「アカデミックスキル」と、語学科目（「日本語リテラシー」と「外国語」）とである。もう一つが、「基礎セルフディベロップメント」の「学部横断型クラス編成」および「グループワーク」と、「自己の探求I」とである。そして、それら両方の要素をとともにもっているという意味で、「基礎セルフディベロップメント」は、武蔵野BASISの典型的科目とみなされていることも示唆された。
2011年度調査では、これと異なる結果がえられた。この点については、(a)アンケート項目の変更、(b)2011年度における武蔵野BASIS科目の授業改善、(c)学生の質の変化など、いくつかの要因が考えられる。ただし、現段階では、その要因を特定することはできなかった。
- 9) 前掲、岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣、2012年。
- 10) 同論文。

貢献：本稿は、基本的には岩田が分析・執筆したものである。共同研究者の北條は、成績などの学生の個人属性データを整理し、それを授業評価アンケートデータとマッチングする作業を行うとともに、授業評価アンケート項目の作成を岩田と共同で行った。

付表：アンケート調査票

平成23年度 武蔵野BASIS アンケート

このアンケートは、全学共通基礎課程「武蔵野BASIS」について、その効果を検証し、今後の改善に活用するために行うものです。なお、調査の重要性に鑑み、記名式としております。回答は統計的に集計し、成績評価には全く影響ありませんので、率直な回答をお願いします。また、今後の改善に向けて後日、ヒアリング調査にご協力いただく場合があります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

【回答方法】

- ① 全て黒か赤のボールペンまたは水性サインペンで記入してください。
- ② 始めに、「学科・専攻」「学籍番号」「氏名」を記入してください。
- ③ マーク式の設問は、選択肢から回答を1つ選んで○(白枠)をぬりつぶしてください。
- ④ 自由記述は、当該授業に関する意見・感想などを自由に書いてください。
- ⑤ 回答が終わっても合図があるまで、そのまま待っていてください。

所 属 学 科			日文	グローバル	政経	人間	社福	児童	環境学	都市環	薬学	看護
※該当する○にマークをして下さい(英米の学生は「グローバル」にマークして下さい)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学 籍 番 号			0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
※該当する○にマークをし、[]には学籍番号を記入してください	(例)											
	1	上1ケタ[]	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○
	0	上2ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	1	上3ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	上4ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	0	下3ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	9	下2ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	下1ケタ[]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
氏 名												

	そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	思わない
1 「仏教概説1」(建学科目)について	4	3	2	1
①授業を通して、本学の建学の精神について理解した	○	○	○	○
2 「健康体育1」について	4	3	2	1
①授業を通して、身体運動の大切さを理解した	○	○	○	○
3 「コンピュータ活用基礎1」について	4	3	2	1
①授業を通して、大学での今後の学びに必要なコンピュータスキルが身についた	○	○	○	○
②授業の難易度は適切であった	○	○	○	○
4 「日本語リテラシー」について	4	3	2	1
①授業を通して、大学での今後の学びに必要な読み書き能力が身についた	○	○	○	○
②添削課題の量は適切であった	○	○	○	○
5 「外国語」(英語／初修外国語)	4	3	2	1
①授業を通して、今後も「外国語」の学習をしようとする意欲が高まった	○	○	○	○
②授業の難易度は適切であった	○	○	○	○

	そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	思わない
6 「武蔵野BASIS基礎」について	4	3	2	1
①このような授業内容が今後どのように役立つのか理解できなかった	○	○	○	○
②授業内容が高校時代に習ったことなので大学で学ぶ必要はないと思った	○	○	○	○
7 「基礎セルフディベロップメント」について	4	3	2	1
①授業を通して、ノートのとり方や図書館の活用法などのアカデミックスキルを身につけることができた	○	○	○	○
②授業を通して、興味を持った学問テーマはいくつありましたか [4:7つ～4つ、3:3つ～2つ、2:1つ、1:なし]	○	○	○	○
8 各授業の満足度について	4	3	2	1
①「仏教概説1」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
②「健康体育1」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
③「コンピュータ活用基礎1」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
④「日本語リテラシー」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
⑤「外国語」(英語／初修外国語)の授業の内容について満足した	○	○	○	○
⑥「武蔵野BASIS基礎」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
⑦「基礎セルフディベロップメント」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
⑧「自己の探求Ⅰ」の授業の内容について満足した	○	○	○	○
9 総合評価	4	3	2	1
①「仏教概説1」、「健康体育1」、「基礎セルフディベロップメント」、「自己の探求Ⅰ」での、学部横断型のクラス編成はよかった	○	○	○	○
②「基礎セルフディベロップメント」、「自己の探求Ⅰ」でのグループワークにより、他の人の意見を聴くことができてよかった	○	○	○	○
③武蔵野BASIS(全学共通基礎課程)は全体として有意義であった	○	○	○	○
10 大学生活について	4	3	2	1
①大学の授業は高校までの授業とは違っていると感じた	○	○	○	○
②新聞をよく読む方である	○	○	○	○
③よく読書する方である(マンガ、雑誌を除く)	○	○	○	○
④大学生活は楽しい	○	○	○	○
11 武蔵野BASISへの意見・感想 * 具体的な科目名を挙げてお書きください(設問8の①～⑧を参照のこと)				

ご協力ありがとうございました